

はじめに

船橋市では、障害のある方の一般就労に向けた取り組みの一環として、職場実習の受け入れ事業所を開拓しています。

「市立船橋特別支援学校」の生徒を中心に、「市立中学校特別支援学級」の生徒、「障害者就業・生活支援センター」の利用者など、市内在住の障害のある方の、一般就労に向けた職場実習の機会を増やすため、市内や近隣市の事業所へお伺いしております。

事業所の障害者雇用状況や計画をお聞きし、職場実習及び雇用の検討をしていただける事業所に、市立船橋特別支援学校、市立中学校特別支援学級や障害者就業・生活支援センターの担当者をご紹介します。

また、船橋市は障害者職場実習奨励金及び雇用促進奨励金のふたつの奨励金制度をご用意し、本年度からは障害者雇用優良事業所表彰制度も実施するなど、障害者雇用の推進を促す取り組みを行っております。

障害のある方の一般就労に向けて、職場実習は、できることやできないことをお互いに確認できる有効な手段と考えております。この事例集をご覧ください、障害のある方を受け入れる際の、「今まで雇用したことがない…」「何に気をつけたらいいのか…」などの不安や疑問に対する参考のひとつとして活用していただければ幸いです。

船橋市役所経済部商工振興課



奨励金制度のご案内

<<船橋市雇用促進奨励金>>

※平成 25 年度から内容が変わっています

市内事業主が、ハローワークを通して市内在住の高年齢者(55 歳以上)、あるいは障害のある方を採用し、その雇用が 1 年以上継続した場合に対象となります。

対象労働者が、①雇用保険に加入していること、②雇用保険に加入できない場合は所定労働時間が週 20 時間以上あることの、いずれかを満たしていただく必要があります。

雇用した日の属する月から 6 ヶ月以内に必要書類をそろえて申請し、同月の 12 ヶ月経過した月の翌月 30 日までに実績報告と請求書などを提出してください。

対象労働者ひとりにつき 18 万 6,000 円を、審査の上で交付します。

<<船橋市障害者職場実習奨励金>>

市内在住の障害のある方をあっせん事業所(特別支援学校、障害者就労支援事業所等)を通じて職場実習を受け入れた場合、**ひとり 1 回につき 5 日以上**の受け入れに対し、**2 万円を交付**します。

実習に対する報酬、交通費や食費などの事業所負担はありません。

実習先および事業所の所在は、船橋市外でもかまいません。



いずれも、詳細は船橋市ホームページに掲載しております。
必要書類のダウンロードもできます。

お問い合わせは、

TEL 047-436-2477

FAX 047-436-2466

でも受けております(月~金曜日 9~17 時)。



船橋市立行田中学校 特別支援学級 岩井 康教諭 (左)・岡 寛和教諭



船橋市立の 27 中学校のうち、現在、特別支援学級があるのは 12 校であり、3 年生の担任が進路対策委員会

で生徒たちの進路について情報交換、支援をしています。行田中学校では昨年度、特別支援学級が設置され、生徒が職場実習に出るのは今年度が初めてでした。

岩井 康教諭は、長年、特別支援学級で生徒の指導に当たってきましたが、初めての学校で、地域にどんな実習受け入れ先があるかわからず困ったそうです。そこで、委員会で情報を得て商工振興課に相談しました。

その結果、ふたりの生徒がスーパーマーケットなどに実習に行きました。

「中学生の実習は、卒業後に就職する前提ではない場合が多いのですが、いろいろな体験をして次の段階に進んでも

地域の
実習先を
紹介

らうために必要だと考えています」。業務上、異動がつきものであるため、3 年生の担任ではない岡 寛和教諭にも実習先との連絡などを担当してもらったそうです。

岩井教諭は進路対策委員会のまとめ役をしています。「実習先は、本人や保護者の希望、得意なことなどから検討しています。生徒によっては、家や学校の近所が安心だという場合や通勤を経験したい場合もある」のですが、「地域で長く協力してくれる事業所はありがたいです」と、中学校ならではの話を聞かせてくれました。しかし、教諭の異動や、今回のように学校との付き合いがなかったりする場合もあり、「市のシステムを有効に活用できれば」と、岡教諭も言います。

船橋市立船橋特別支援学校 進路担当 藤間 緑教諭 (左)・朝日大介教諭



市立特別支援学校には小学部から高等部までがあり、職場実習に出る高等部の生徒は人数が増えているそうです。実習先については、夏休みを中心に教諭たちがいっせいに開拓をしますが、人数分の実習先を確保するためには、それ以上の受け入れ事業所を探す必要があります。

昨年度から、県内の特別支援学校間で「就労支援ネットワーク連絡会」という制度が始まり、事業所や就労支援に関する情報を共有しています。開拓した学校が窓口となり、事業所と県内の特別支援学校の間で調整役をします。

この学校の就労支援コーディネーターである藤間 緑教諭は、「独自に開拓をおこなっている自治体は少ない。事業所の事情や担当者をよく知る開拓員は、学校や実習の様子を見学して生徒たちの幅広い個性も理解しているので、紹

市の
開拓事業と
連携

介してもらえる事業所は役に立ちます」と話します。

生徒の 3~4 割が一般企業への就職をめざしており、希望者の就職率はほぼ 100%とのこと。船橋市の事業である職場実習先開拓は、障害のある市民に活かしていただくため、この学校に優先的に事業所を紹介しています。朝日大介教諭は、「以前は企業に電話をしてもなかなか訪問できませんでしたが、市が開拓から啓蒙までしてくれるのは助かります」と言います。

「就職した卒業生も、3 年間は学校主導で定着支援をし、障害者就業・生活支援センターにバトンタッチしている」という学校と、企業との長く良好な関係を見守りたいという開拓員の姿勢は、通じるところがあります。

大久保学園障害者就業・生活支援センター 矢吹亮介主任就業支援員



障害者就業・生活支援センターは、千葉県内に 16 ヶ所あり、障害のある方の就業やそれを支える生活、そして障害者雇用をする事業所(企業)からの、雇用に関する相談や支援をおこなっています。

船橋市を圏域とするのがこちらのセンターで、「現在 330 人ほどの障害者が利用登録をしています」と矢吹亮介主任就業支援員。船橋市には就労移行支援事業所(※)が 10 数ヶ所あり、矢吹支援員は「他市にくらべて企業が多く都内にも通勤しやすいことが理由でしょうか」と話します。

利用登録者の 6~7 割が既に就職しているので、定着支援にも力を入れています。障害の種別を限っているわけではないため、知的、身体、精神の各障害者が相談に訪れ、

マッチングを
大事に

その数は年々増えています。学生と違い、希望する就職先がうまく見つければ、すぐにでも就職することができる人が多いようですが、実際には本人の障害や企業についての理解が不十分だったり、企業の体制が整っていません。

「大事なのはマッチング」と矢吹支援員が言うように、雇用を継続させるためには最初が肝心です。そのためにも実習を経て雇用してもらえるよう、事業所(企業)をお願いしているそうです。

※就労移行支援事業所＝就業を目指す障害者に、必要な知識、訓練の機会を与えて相談や支援をおこなう事業所。

さまざまな事業所で職場実習を受け入れていただきました

有料老人ホーム

(株)レオパレス21 あずみ苑グランテ三咲

入吉満夫施設長



3年前、初めて施設を訪れた時には、既にひとりの身体障害者は雇用しているものの実習受け入れ経験はなく、前向きに検討してくれました。しかし、マッチングできる方が見つかりませんでした。

今年度、改めて実習受け入れについて確認したところ、「会社としては特例子会社を設立して障害者雇用をしているが、各施設でも実習や雇用を進めていきたい」と、特別支援学校高等部3年生の実習が決まりました。

入吉満夫施設長は、以前にも別の施設で自閉症やアスペルガー症候群の方と働いたことがあり、その難しさも経験しています。

学校の進路担当教諭は、「介護補助というより、その周辺の環境整備から利用者や雰囲気慣れていく実習」を希望。入吉施設長は、雇用を見込んだ3年生の秋であることから、①監督者がいる、②難度がそれほど高くない仕事、③入居者と直接接することのない部署での受け入れが可能と判断し、「自社で雇用している清掃部門」で本社に確認をとり、本人や保護者との面談を経て実習が始まりました。

清掃部門で働く身体に障害のあるスタッフが指導をされました。清掃場所に合った薬剤の使い方、タオルのたたみ方などを丁寧に教えてもらい、補助



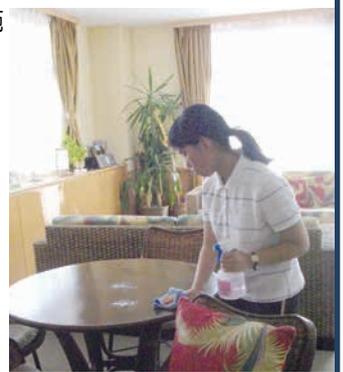
段階を経て雇用につなげる

的な仕事を一生懸命こなしました。

スケジュールどおりに仕事をしようとするあまり、時間になると作業が途中でやめてしまうなど課題はありましたが、「時間内に終わるように、手順やスピードを考えて」とアドバイスしました。2週間の実習の最後には、自分で掃除機を用意したりわからないことは聞いたりできるようになりました。

年が明けてすぐおこなわれた2度目の実習では「長期的・継続的な仕事ができるか」を見極め、雇用に向けてより具体的なチェックがされました。

「障害があろうとなかろうと、働くことはできます。障害があるからといって差別的に見ることは、人材的にもったいない。任せられる仕事があれば受け入れに踏み切ってほしいですね」と、入吉施設長は話します。



有料老人ホーム

(株)サンケイビルウェルケア ウェルケアテラス谷津

高橋亜也加さん



まだ新しい会社であり、この施設のオープンが平成25年10月と間がないため、障害者雇用や実習についても「これから考えていかなければ」と思っていたところに、市の開拓員がアンケート調査に訪れたそうです。

しかし、清掃や厨房は業者に委託しており、直接雇用しているのは、事務、看護、介護業務でした。

開拓員は特別支援学校の進路担当教諭を施設に紹介。検討の中で、教諭が「他の施設では、利用者の日中活動補助、配膳下膳の手伝い、車椅子の清掃などを行っている」といった例を挙げました



高橋 亨ホーム長は「雑務的なものを集めることはできるかもしれない。就労意欲があがる仕事もおいおい任せられるようになればいいのだが」と、前向きに考えてくれました。

その後、本社にも相談の上で「配膳、清掃などの間接業務で受け入れをしたい」と高橋ホーム長から教

諭に連絡があり、高等部3年生の実習をお願いすることになりました。

生徒はおとなしく真面目な方。施設の担当は、以前の職場で障害者就労に携わっていた看護・介護主任の鈴木恵子さんと、実習生に歳の近い介護職員の高橋亜也加さんになりました。

まず、お茶の準備、洗濯物仕分け、おしぼりタオル巻き、おやつ配りなどの仕事を組み込んだスケジュール表を作ったそうです。そして、「いろいろな人から話しかけると混乱するかもしれない」と、指示は担当のふたりからしか出さないことを、ほかの職員とも決めました。

一度にいくつもの指示があると混乱したり、テレビの近くや利用者と話しながらの作業は苦手だったりしますが、逆にひとつのことには集中して取り組めたそうです。

鈴木さんと高橋さんは、「障害者の就労について、職員と知識の共有をする必要性は感じます。自分たちだけではなくいろいろな人に支えられて現場ができていることを、学んでもらいたいですね」と話し、障害特性や雇用の仕組みなどの勉強会についても、支援機関や学校などと協力して開催する可能性を示唆します。



歳の近い職員を担当について

「介護老人保健施設」は、介護を必要とする高齢者の生活機能を維持・向上させるため、リハビリテーション訓練などで総合的に支援する施設です。

3年前に開拓員が訪れたアンケート調査では、「障害者雇用は難しい」との回答でしたが、特別支援学校からの体験的な実習は、以前から受け入れています。「実習に関しては障害の種別や程度は問いません。仕事内容も時間も、その人に合わせます」と、宍倉弘康事務長は言葉を添えました。

今年度、特別支援学校高等部2年生で、施設の近くに住む生徒が実習を希望。春に2週間、清掃の仕事で受け入れが決まりました。



実習最初の数日は、生徒の担任教諭と一緒に作業をし、生徒にわかりやすい手順書を作りました。また、清掃担当の職員にも生徒の特性を説明し、ひとりでもスムーズに仕事ができるように

サポート体制を整えました。

廊下や居室の床をペーパーモップできれいにするのが主な仕事。端から真っ直ぐ丁寧に



モップをかけることができます。居室の清掃は利用者が不在のときに限るのですが、それでもノックと「失礼します」の声かけはしっかり行います。

秋、同じ生徒の2度目の実習が行われました。作業は春と同じですが、宍倉さんは「2回実習に来た例は初めて。前回の仕事をよく覚えているし、ルールを守ることができます」と感心しました。

実習受け入れ経験の豊富な施設で、今回も「生活リズムを崩さないことが大事。できるだけ学校で過ごすのと近い時間で実習してもらいました」。施設の見取り図をコピーして、「午前中は黄色、午後はピンクの部分清掃する」と色分けして、視覚的にわかりやすい指示書を作ったそうです。

現在はこの施設でも障害者求人を出しており、適した人がいてタイミングが合えば雇用も検討しているそうです。「学校や保護者が仕事に理解をもって、就労のチャンスを生かせるといいですね」(宍倉事務長)。



施設の見取り図で指示書



デイサービスとグループホームを併設するこの施設で、デイサービスでは中学校特別支援学級から障害のある生徒の実習を受け入れたことがあるそうです。

今回、水谷周平施設長に高等部生徒の実習について聞いたところ、「同様の実習は可能ですが、雇用の経験がないので条件などについては勉強が必要です」との返答があり、特別支援学校の進路担当教諭と共に開拓員もデイサービスとグループホームの両方を見学。春、3年生の実習受け入れが決まりました。

実習生はフレンドリーな性格なのですが、ケア施設での実習に緊張しているようでした。しかし、デイサービスでレクリエーション補助をしているうち、慣れて笑顔が出るようになりました。そこでグループホームでの仕事に移り、利用者の話し相手、配膳下膳、共通キッチンでの洗い物、洗濯物たたみなどの作業をしました。

家庭で台所仕事を手伝っており、食器洗いは手馴れて



います。ただ、利用者の名前はちゃんと覚えたものの、自分から話しかけるのは難しかったです。

「グループホームで大事なのは『利用者に寄り添う』こと。面接時、彼女にはそこが

適していると思ったので、最初の実習ではまず利用者とコミュニケーションをとってもらうことをメインに、2度目では、より

具体的に何をしてもらうかを考えました」(水谷施設長)。秋、2度目の実習では、大きな声であいさつをすることができるようになっていました。3年生であり、雇用も見込んで実習生に適した仕事があるか、水谷施設長や現場職員、学校の教諭で話し合いが持たれました。本社の障害者雇用担当者からは、仕事内容の見直しとマニュアルの提示がありました。

「マニュアルには、清掃の手順、そうきんをかける方向などを、写真入で細かく記載してあります。実習生だけではなく、職員にも実践してもらいたい内容です」実習生に仕事を教えることで、職員は、自分や自分の仕事を見直すきっかけになりました」と、水谷施設長は実習受け

入れの効果について話してくれました。



実習受け入れで別効果も



東武ストア津田沼店は、京成津田沼駅前にある開店間もないスーパーマーケットです。障害者雇用や実習の受け入れ経験ありません。

しかし、会社としては本社(東京都板橋区)や各店で多くの障害のある方を雇用しています。開拓員が本社人事部にアンケート調査のため訪問したところ、担当の前野英明さんは「船橋市やその近辺にいくつかの店舗がありますが、規模が小さかったり既に複数人の障害者雇用をしていたりする店もあります。ただ、受け入れができそうな店もあるので確認してみましよう」と、答えてくれました。



その後、開拓員から特別支援学校の進路担当教諭を紹介した際には、前野さんから「あいさつと店頭の商品出しができる人を推薦してください」と要望があり、教諭は「バックヤードの仕事は可能ですか?」と質問。

「働く意欲」があればよい

「バックヤードだけという仕事はありませんが、働く意欲があれば受け入れは可能です」と前野さんは答えました。

高等部2年生で希望者が出たので、教諭から前野さんに申し込みがされ、検討の結果、津田沼店での実習に至りました。

開拓員が実習の様子を見に行った時には、バックヤードで野菜をパッキングしているところでした。トレイにトマト3個を並べ、ラップをかける作業で、教諭によると「これができる生徒はあまりいない」そうです。初め2日間、付き添って一緒に作業をした担任教諭は「問題はなさそう」と、あとは巡回に切り替えたとのこと。

税所 輝店長は、「パートスタッフには自分から話しかけるなどコミュニケーションがとれていたし、関係もよかったようです」と振り返ります。店頭での品出しは、「お客さんから問い合わせがあったらスタッフにつなぐ」と指示はされていましたが、実際にはそういう場面はなく、本人は「接客もしてみたい」と言っていたとか。

保護者からは「朝はちゃんと起きて実習に通った。家庭でもすすんで手伝いをするようになった」と聞いたそうで、「ここでの実習が生徒の生活にいい影響を与えたのならうれしい」と、税所店長は喜んでます。



ショッピングモールの中にあるこの店は、1階と2階にまたがる規模の大きさで、食料品、日用品、衣料と、扱う品物も多岐に渡ります。現在、知的障害のあるふたりが、バックヤードで衣料品をハンガーにかけたり、店頭で品出しをしたりして働いています。

会社としては障害者雇用を進めていく考えはあるのですが、この店での新たな雇用については検討が必要とのこと。しかし、体験的な実習は受けた経験がないそうです。それでも秋山康二郎次長は「品出しであれば可能かもしれない」と特別支援学校進路担当教諭の紹介に応じてくれ、秋に高等部2年生の実習が決まりました。



開店前の品出しをメインに

「バックヤードでコンテナに日用品を積み直したり、衣料品をハンガーにかけたりする作業ではどうか」と秋山次長が提案すると、教諭は「このショッピングモールでは学校で作った製品の頒布会を催したこともあり、そこで働くことができるのは生徒にとってあこがれです。洋服が好きで販売をしてみたい生徒もいますし、重いものを運ぶ体力のある生徒もいます」と受け入れに感謝しました。

広い店舗でバックヤードの通路も複雑ですが、すぐに覚えて、巡回の担任教諭に「その売り場はあちから行ったほうが早い」と教えてくれたとか。

朝8時に出勤し、荷物を開店前に棚に並べる作業から始まります。食品は、賞味期限を確認しながらの品出し。その後、バックヤードで開梱したトイレットペーパーを並べなおしたり、店頭で品出しをしたりする作業が続きます。店が広くスタッフは走り回っていますが、「わからないことは〇〇さん、いなければ△△さんに聞く」と決め、また、近くのスタッフに聞けば担当の方をインカムで呼んでくれるなど、安心して実習できたようです。

秋山次長は「作業スピードはそれほどでもありませんが、ハンガーかけなど丁寧にやってくれました。簡単な指示であれば1回で理解したし、いつも元気よく笑顔であいさつしていましたよ」と高評価をくれました。



お惣菜で知られるフジッコの工場は、船橋市の京葉食品コンビナートにもあります。会社として障害者雇用には積極的に取り組んでおり、この東京工場でも現在7人が働いています。また、職場実習も毎年ひとりを受けています。



担当する仕事は、加工、運搬、コンテナ洗浄とさまざまで、谷井徳尚総務課長は「その方のできることから考えている」そうです。

今年度、実習に行ったのは特別支援学校高等部1年生。空手を習っているという男子生徒です。加工の現場で、冷凍食材の開梱などをしました。

女性が多く働く部署ですが、今回指導してくれた先輩は、2年前に特別支援学校の実習を経て入社した知的障害のある男性でした。谷井課長が「お兄さん役をやってくれないか」と頼むと、「わかりました」と了承してくれました。物静かな責任感の強い方で、ふだん自分がしている仕事を実習生に説明し、一緒に働いてくれました。「教えることで、過去に学んだことを繰り返し覚えることができると思い、頼みました」(谷井課長)。

煮物用の冷凍カット野菜は10kgあり、体力が必要です。また、他のスタッフが計量したスープ用の食材を、容器の中で両腕を使って混ぜる作業は、中腰で行わなければなり

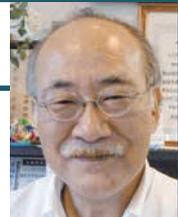
ません。しかし実習生は「たいへんだけれどやりがいがあります」と、顔を輝かせていました。

谷井課長は「礼儀正しくあいさつも大きな声でできます。一度出した指示はちゃんと覚えていますから、様子を見て新しい仕事にもチャレンジしてもらいたいですね」と話していました。

「今後も実習の受け入れはおこなっていきますし、その中で、いくつかの仕事ができる人がいれば雇用の可能性もあると思います」と言う谷井課長は、「子どもの頃、近所に障害児の施設があってよく遊びに行っていたせいか、障害のある方に対して身構える気持ちはありません。むしろ、特別に考えていないのかもしれませんが、だから『一緒に働いてもらう』と思っています」と心強い言葉をくれました。



「できること」から内容決定



昭和27年から船橋で高級佃煮を販売しており、現在は市内に工場と3つの直売店を構えています。

そんな工場には、20年以上前から働いている自閉症の男性がいます。知り合いの紹介で雇用したそうですが、今では現場の大事な仲間になっています。

瀧口 徹社長のもとには、あちこちの特別支援学校から実習や雇用の打診があるそうです。「工場には機械が多く熱湯を使ったりもするため危険」との判断で、「体験的な実習なら」と、直売店で商品を入れる袋の製作で受けられました。

これまでに、市内中学校特別支援学級3年生の実習を何度か受けており、「断る理由はない」と瀧口社長。本店のすぐ近くにある中学校は社長の母校であるだけでなく、店のチーフ森かおりさんのお子さんがかつて部活動で指導を受けた教諭が、この学校の特別支援学級の担任

として実習依頼に来たことも、スムーズな受け入れにつながったようです。

今年、高等部1年生の実習を受けてもらいました。中学3年生と比べると「体力的に少し勝っているかな」と、森さんは思ったそうですが、おとなしい生徒で、指示通り、佃煮を入れる袋にシールを貼る作業をしていたそうです。

職場は直売店のバックにあり、数人の「お母さん」くらい

の女性が働いています。

障害者の実習に慣れており、商品名が書かれたシールを決められた場所に貼るために、空き箱でストッパーを作るといった工夫がされています。ガイドに合わせてビニールの袋を置くと、下の見本が透けて見えるため、定位置にシールを貼ることができます。

瀧口社長は「地元生まれの地元育ち。地元のために協力したい」と話します。森さんの夫も地元育ち、お子さんもその母校を卒業して、今は特別支援学校の講師をしているそうです。

贈答品用に購入するお客さんが多いため、繁忙期の受け入れは難しく、また、たくさんの学校や支援機関から申し入れの電話があると対応がたいへんだということで、



「商工振興課を通してほしい」と言っているそうです。また、受け入れ検討企業に対しては「実習生の情報を事前にしっかり聞いておけば、現場の不安も



解消できますよ」というアドバイスもくれました。

地元のために協力したい

船橋都市サービスは、駐車場管理や清掃などを行っている会社です。業務課の菅谷晋吾課長と仲村謙一さんは、市ホームページで障害者雇用について調べたそうで、商工振興課に問い合わせをもらいました。そこで、開拓員がアンケート調査に訪れたところ、「今まで高齢者の雇用を積極的に行ってきたが、障害者も受け入れようと検討している。しかし、障害者雇用に関しては初めてで手探り状態」とのことでした。

会社から「障害者が働きやすい環境はどのようなものか?」「どういう仕事が得意か?」という質問があったため実際の環境での職場実習を勧め、特別支援学校と障害者就業・生活支援センターを紹介。後日、特別支援学校で生徒の日々の生活を見てもらい、学校が推薦する高等部3年の男子生徒を、清掃現場で実習生として受け入れてもらいました。

実習は2週間。指導役の山中弘子さんと一緒に清掃を行い、掃き・拭き掃除、モップ掛けなど、基本を教えてもらいました。山中さんは清掃の経験は長いものの障害者と接したことがなく、初めはコミュニケーションのとり方に不安があったそうです。しかし、「お預かりしたからには自分の息子だと思って、基本をしっかり教えよう。どこでも清掃ができる自信を持ってもらえるようにしよう」と、

基本を繰り返し教えていく

用具の持ち方、力の入れ方から、つきっきりで根気よく繰り返し教えたそうです。左利きでどうしても左手ばかり使ってしまう実習生に、「両手が自由に使えると生活も仕事も楽になる」と、日常でも右手を積極的に使うよう話していたそうです。「清掃を学ぶには短い期間でしたが、大人でも難しいことまで一生懸命で、だんだん上手になることが本人もうれしかったようです」と、山中さん。

実習生は、終了後もモップを借りて、家や学校で清掃の練習をしたそうです。そして本人が希望し、1ヶ月後に2回目の実習が予定されました。「本人のやる気を強く感じました。就業も視野に入れて仕事ぶりを見たい」と、仲村さんは期待します。



中学校特別支援学級の生徒も職場実習に出ています

これまでご紹介したのは、特別支援学校高等部（基本的に16~18歳の方）の実習例です。

しかし、企業などでの職場実習は、障害者就労支援事業所を利用されている方や中学校の特別支援学級に通っている3年生からも希望があります。すべての方が企業を希望するわけではなく、また就労を前提としたものとは限りませんが、社会経験として実習をしています。

ここでは、そんな中学生の実習受け入れ事例をご紹介します。



高齢者住宅、ショートステイ、デイサービスを併設する施設で、デイサービスでひとりの障害者が働いており、実習についてもここで受けてもらいました。

担任教諭と生徒で訪れた面接に、開拓員も同席しました。岩崎邦彦施設長は病院勤務が長く子ども好きということで、生徒の緊張を和らげながら会話をします。「その

配慮しても区別しない

人の個性や得手不得手を知るには、生徒さんと会話しながら表情を見て情報を得ますが、学校での様子や健康面、家族関係、注意すべき点

は事前にしっかり、教諭に聞いておきます」。

今回の実習生は、お茶出しやレクリエーションの手伝いをしました。「折り紙が得意」と言ったので一緒に折るよう頼んだところ「想像しながら折るのは苦手ですが、お手本があればできます」と答えました。「自分のことを理解して人に伝えることができる人だ」と思ったそうです。

休憩時にはほかの職員と、施設で作った食事をとりながら「好きな芸能人」の話などをしていたそうです。

岩崎施設長は、「障害者としての配慮はしますが、他の中学生の実習との特別な区別はしないようにしています」とにこやかに言いました。



焦らず理解をすすめる

障害者雇用について院内の整備がこれからであるため、今回、栄養科での実習受け入れは、生徒だけではなく病院にとっても「体験」の実習になりました。

バスで通ってくる実習生を、栄養科長は毎朝、迎えに出ていたそうです。小川美緑課長は、「彼女の健気さを、みんなが応援していた」と振り返ります。

透析が必要な患者さんのため、院内の厨房で食事を作っており、実習生はこの配膳、食器洗浄を中心に作業をしていました。そのほかの時間は、事務補助として書類整理をしたり、入院されている方のために折り紙を作ったりしました。

体力的にたいへんな部分もあったようですが、職員に労いの言葉をもらいながら実習を終えました。

まだ新しい「障害者雇用推進課」ですが、小川さんは、「焦らず仕事を切り出し、院内のさまざまな部署で理解を進めていきたいですね」と意欲を語りました。



職員のチームワークで

二和から移転し、昨年8月に介護複合施設になりました。以前から、一般中学生の職場体験や特別支援学級生徒の実習を多く受けており、職員は対応に慣れていています。



今回の実習生は新施設になって初めて受けますが、二和の頃から在籍している職員が多いので、「自閉傾向が強いという印象はありましたが、受け入れに不安はありませんでした」と山林由布子施設長。

実習内容はデイサービスでの補助作業です。細かい部分は生徒によって変え、この生徒はあいさつ、お茶出しなどを目標にしました。現場担当の飯野沢子さんは「職員で『顔を上げて話そう』『目を見て話そう』と声をかけました」



と言ひ、最終的にはリーダーの隣でラジオ体操をしていたそうです。

「実習生を受け入れることで、職員のチームワークを育むことができると、山林施設長は意義を語ります。

自立の手助けになれば

JAの直売所として3年前にリニューアルしましたが、それ以前から15年ほど働いている知的な障害のある男性がおり、品出しや袋詰めの仕事をしています。



しかし、最近では野菜を袋詰めする作業が減り、実習は「店頭で品出しができる人でなければ、実習期間中にできる仕事がない」(小寺広文所長)状況でした。

それでも、すぐ近くの中学校から希望者が出たため、担任教諭の紹介を承知してくれました。

教諭は「初めての实習であり、本人も課題を持っているので学校の近くで受け入れてもらえよう」と伝え、小寺所長は「本人にやる気があるなら」と引き受けてくれました。



袋詰めのほか、機械で値札シールの打ち出しもしました。教諭が心配していた「課題」については、パート職員が気かけ、無事に実習を終えることができました。



小寺所長は、「私にも中学生の子どもがおり『特別支援学級の生徒も同じ中学生である』と話をすることがある」そうです。「将来的な自立の手助けになればと協力しています」と、実習受け入れについて話していました。

しっかり打ち合わせを

当店で、今までにも中学校から職場実習を受けており、加藤綾乃チーフは「実習なのでできることは



限られますが、『仕事の体験』ということなので、少しでもいろいろ経験をして『仕事とはこういうもの』とわかってほしい」と、受け入れ姿勢を決めています。

バックヤードの仕事は青果のカットなどがあるため、実習には店頭での菓子や日用品の品出しをしてもらおうそうです。今回も、パート職員と一緒に作業をしていました。



岩楯和也店長は、「今までには、パート職員に甘えてだだをこねたりし、困った生徒もいました。すぐに学校に連絡し、教諭に来てもらいました」と言います。

今回の生徒はそういう問題はなかったそうですが、この経験から「先生や保護者が『大したことではない』と思っている事項が、受け入れ側には大切なこともあるので、事前の打ち合わせはしっかりしています」と、加藤チーフは言っています。



会社から雇用の相談があった例です

建設・資材販売

(株)ECHIGOYA

山内正和専務取締役



建物施工、販売、リフォームまでおこなう森興業グループの中で、資材販売をするのが当社です。

「それぞれの会社で障害者雇用をするのは難しいので、グループ3社で数人を雇用したい」と思う、山内正和専務取締役

が商工振興課を訪れました。

障害者雇用に関するアンケート調査で会社の考えを改めて聞くと、森 哲也代表は先天性の網膜の障害を持ち、更に山内専務のお子さんのひとりが、特別支

援学校に通っていることがわかりました。山内専務は保護者の会メンバーとして学校を訪れたり、ほかの特別支援学校を見学したりする中で、知的障害のある方がどんなことを得意とするかも、だいたい理解しているとのことでした。

そして、「建設現場での雇用は無理だが、自社で資材加工をしている場であれば可能ではないか」と考えていました。建築で使用する鉄筋をカットしたり曲げたりしており、工具を工夫すれば障害のある方にも作業ができるのではと、他市の特別支援学校から教諭に体験に来てもらったそうです。そして、「この仕事なら任せることができると確信を持ったということでした。

加工場は、特別支援学校から程近い場所にあります。開拓員は、障害者雇用についての企業からの相談を受けている障害者就業・生活支援センターの支援員とともにここを見学しました。

現場に出ているトラックが午後、ここに戻ってきて翌日の資材を積むので、加工もそれからの作業になります。しかし、鋼材は大量に使用する上に販売もしているので、いくらでも加工したいと思っているそうです。

その後、特別支援学校の進路担当教諭から紹介依頼があり、山内専務は「この機会に学校の作業



の様子を見たい」と希望しました。

そこで、教諭の案内で農耕、窯業、縫工、木工に従事する高等部生徒の

様子を見ることになりました。

木工では、木材をカットしたりグラインダーをかけたりする作業や、機械に設置する補助具を、熱心に質問しながら写真を撮っていました。切断機の回転する刃にかぶせる透明なカバーや、カットする長さを一定にする取り外し可能なストッパーなどで、こうした補助具は、教諭たちの試行錯誤でできており、生徒たちが使う様子を見て改善を重ねています。「生徒によって能力が違うので、つけ外しができるようになっています」という教諭の説明を、山内専務は感心しながら聞き入っていました。

その後、教諭から「来春の実習に向けての計画」が示されました。補助具について詳しい教諭と加工場を見学し、障害のある方が安全に作業をするための補助具を提案。準備が整えば実習受け入れを要請する、というものです。

山内専務は、「今は現場の指導者が定まっていないので、それも含めて前向きに検討します」と返答。加工場見学の日程を決めました。

翌月、教諭たちが加工場を見学を訪れました。そして、提案されていた鉄筋加工の現場や機械を見た上で山内専務に質問する中で、やはり建築現場のコンクリート基礎を



作るのに必要な「型枠」の洗浄についても、任せることができのでは、という話になりました。そして、今後は現場の指導者が決まればその方と相談の上、補助具の検討に入るとのことです。

この春、準備が整って実習の受け入れが可能になるか、今はまだはっきりしていません。しかし、「中途半端な状態で受け入れのお願いしても、障害のある方と企業のどちらにとってもいい結果にならない」との考えから、長く良い関係を保つため、話し合いが続きます。

このように、障害者就業・生活支援センターや特別支援学校とともに、仕事を切り出したり働きやすい環境を作ったりすることもあります。



社会福祉法人清和会は、船橋市内でふたつの特別養護老人ホームを運営しています。ワールドナーシングホームには約100人の職員がおり、障害のある方はふたりです。ひとは厨房での食器洗浄、もうひとは管理課で館内の清掃を担当しています。

清掃の仕事をがんばっているのが、茂木 望さん、19歳。昨年度、特別支援学校在学中に実習をして、卒業後の6月に採用されました。



こちらともうひとつの施設で食器洗浄をしている障害者は、茂木さんの学校の先輩たちです。また、ほかにも何人かの職場実習も受けてもらいましたが、雇用のタイミングが合いませんでした。

「昨年、開拓員が特別支援学校の進路担当教諭を事務長に紹介した際には、「今までは厨房での障害者雇用をしていたが、新たな仕事として清掃を考えたい」と聞きました。「床のモップがけだけでも、丁寧にやれば一日仕事」と、求人を出したところでした。そんな時、学校



から茂木さんが実習をすることになりました。

仕事は、廊下のモップがけのほか、車椅子の手入れや清拭タオルたたみ、利用者のカップ洗浄など。

中田俊一管理事務部長は、「最初はあいさつもしてくれず、不安に思いました」と笑います。「現場がとてもよくみてくれたんですよ」という中田部長の言葉に、管理課の古川三喜男さんは、「自分の子どもや孫と一緒に。悪いときは叱るよ」。

実習後、本人と教諭で相談し、「このタイミングで採用をお願いするより、もう少し見極めてからにしよう」ということになりました。

そこで、障害者就労移行支援事業所に入所し、生活リズムを整えると共に、こちらでもう一度、実習をおこなうことになりました。



一日の仕事は、利用者の居室にほうきをかけ、廊下や食堂にモップかけることから始まり、午前中はトイレ掃除などもします。管理課の先輩である古川さん、荒井秀子さん、渡辺秀文さんたちと一緒に作業することもあれば、手順を

覚えているのでひとりで時間を見ながら清掃に励むこともあります。

管理課の仕事は多岐にわたり、中庭の草とりから電球の交換、壁紙の張り替えまでおこなっています。また、施設のイベントでは準備から当日の裏方と大忙し。古川さんによると「モップは苦手だけど、床洗浄機はうまく動かす」そうで、機械や工具を使う作業は得意な様子です。

施設では、月曜日のおやつには「喫茶タイム」を開いており、茂木さんもウェイター姿で「いらっしゃいませ」「コーヒーです」と自分から声をかけながら働いています。「最初は緊張したけれど、今は楽しい」と言い、車椅子の利用者にはテーブルの前を空けたり、カップを片づけたりし、時には利用者に見せることもあります。「シャイで、私たちにはこういうところをあまり見せないのですがね」と、渡辺さんが教えてくれました。

年末の餅つきは、利用者も地域の方も楽しみにしている行事。前日から準備に大わらわですが、茂木さんも古川さんの指示で走り回りました。今回は大雨になってしまいましたが、寒い中、荒井さんと一緒にけんちん汁の仕込みをする姿が印象的でした。「茂木ちゃん、コンロに火を点けるときの表情はキリッとしています」。



茂木さんは、古川さんたち仲間のフォローで、ほとんど休むことなく出勤しています。「怒ると固まっちゃう」(古川さん)そうですが、本人は「怒られても仕方ない」と。「厳しくもするけれど、誕生日にはみんなでお金を出し合って中古自転車をプレゼントしたんですよ。仕事をさせるだけでは長続きはしない。現場の皆さんが長い目で『育てる』つもりで接してくれるのがいいんです」と、中田部長は言います。「もっと自分から気軽に話しかけてほしい」と皆さんが言うと、茂木さんは控えめにうなづいていました。まだ働き始めて半年。徐々に本人も周囲も慣れて、しっくりしてきた印象を強く持ちました。



ふなばし あったかばにー



船橋市障害者雇用優良事業所表彰

今年度から、「障害者を多数雇用し働きやすい環境を作るための工夫をしている」「職場実習の受け入れを積極的に行っている」などの事業所を表彰し、広く公表することによって、これから雇用を考える事業所へのアプローチを図りたいとの思いから、この事業を実施しました。

応募のあった市内事業所について審査し、今年度は以下の3事業所が表彰されました。



◎船橋興産株式会社（廃棄物処理）

…職場実習を積極的に受け入れている

◎株式会社三和製作所 京葉物流センター（衛生用品等物流）

…少人数の事業所で雇用をしている

◎株式会社ティーエスケー（集合住宅修繕）

…仕事に集中できるよう環境整備をしている

※取り組みの内容は、船橋市ホームページで紹介しております。



社会人への第一歩 一緒に働こう！



障害者職場開拓における職場実習・雇用受け入れ事例集（平成26年度版）

発行：平成27年3月

文責：船橋市役所経済部商工振興課労政係

船橋市湊町2-10-25

TEL：047-436-2477

FAX：047-436-2466